

前に進むしかない

六月十五日 月曜日 前に進むしかない

僕の乗るバスが三条大橋を渡る。

僕は、バスの窓から、外を見ていた。

鴨川の水が太陽の光できらきらしている。

もう、梅雨にいつ入ってもおかしくないのに。

河原には、若い男女が楽しげに座って話んでいる姿があった。
一瞬、僕は、その姿を、自分とあの子で置き換えて見ていた。

彼女はいるだろうか。

今日は、クラブ活動を風邪ぎみだと言って、
ずる休みして、放課後、早々、バスに乗った。

これは、一種のかけだ。

もしかして、京阪電車南口にいないかもしれない。

それでも、今日は早く家に戻る。

バスが終点の三条京阪の南口の降車場に近づいた。
僕は、バスの中から、あの子の姿を捜した。

いた！

いつもの様に、南口の改札口の前に立っていた。

今日も立っている！

バスが止まり、座席を立つと、僕の体は、戦慄を覚えた。